

一九九七年に施行された「容器包装リサイクル法」容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進などに関する法律」は、二〇〇〇年四月から適用範囲が広がる。現在はガラス瓶やPETボトルに限定をされているが、プラスチックは全般に広がり紙も対象になる。人類の文化が進み、生活が豊かになった半面、限りある天然資源の乱伐・乱掘など自然破壊が進み、また、廃棄物処理の段階で発生するダイオキシンなど、生物が共存する上での障害が増え、豊かな日常生活を求めた代償が大きくなっている。

プラスチックは、早くからリサイクルによる資源循環型の利用が求められていた。当初はポリエチレン容器が定規（モノサシ）やパレットに再生をされていたが、リサイクル革命とは程遠いものだった。PETボトルの再生は着色に難点があり敬遠されたが、今は発想の転換によって、各種の衣料品として登場し、リサイクル商品化が進んでいる。

一九九六年九月、大阪府貝塚市に本社がある「根来産業(株)」に期待をもって訪問したことがある。エコビジネスのバイオニア根来社長は、九七年に施行される「容器包装リサイクル法」をにらんで発想の転換を行った。世界人口が増える中で使い捨て時代が続く訳がない。PETの素材は合繊と同じポリエステル。そこで合繊メーカー並みの設備を導入し「綿」を再生することにした。全国の市町村から委託された廃棄物処理業者は、集めたPETボトルを粉碎機にかけチップ状にし同社に運ぶ。同社はチップを綿状に加工し六十種の原色に染める。綿を撚（よ）って糸状にし太

糸と細糸を作る。組み合わせで三万二千種の色が出せる。展示室にはリサイクルされた絨毯、毛布、カーペット、カーテン、ユニフォーム、Yシャツ、ジャンパーなどが並んでいた。最上町の「(有)横田ビニール山形工場」は、豆腐容器などフィルム容器の生産では国内トップメーカーである。横田社長は、プラスチックの使い捨て容器の新しいリサイクルシステムを世の中に広めようという共通の目的を持つ集団「P&Pシステム協議会」のメンバーである。関連会社の「(株)ヨコタ」(本社：千葉県柏市)は、新庄中核工業団地に敷地五三、八六五平方メートルを取得し約三十億円をかけ

発想の転換で生きる リサイクル素材

庄内銀行理事 天野 佳一

てリサイクル工場を新設する。「日本ポリスチレン(株)」の協力を得て資源循環型の「P&Pシステム」のプラスチック容器を開発した。技術的に難しいPS(ポリスチレン)、PP(ポリプロピレン)を重ね合わせたプラスチックの再生をクリアした。容器の内側にフィルムを張り、弁当容器など内側の汚れた薄いフィルム部分は剥がして焼却し、トレイはリサイクル工場まで再生できるようにした。その結果、焼却部分は二十分の一に減少する。すべてを再生することではなく、衛生上捨てる部分も必要という発想だが、作業量やコストの削減に貢献したことになる。新庄市は市政五十周年に当たり環境保全都市宣言をする予定であ

る。「P&Pシステム容器」の新工場は六月に着工し十一月には稼働する。新幹線が十二月四日に新庄まで延伸するのと同じ時期に山形県発のリサイクル容器が、まず山形県内にお目見えする。そして全国に普及することを期待したい。

少し視点を変え産業廃棄物処理業である「(有)後藤実業」(本社・天童市)の生ごみを資源にしたエコビジネスに注目したい。同社は給食センターやレストランから出る厨芥(食品残渣)を、高栄養価の飼料に変える「厨芥リサイクルシステム」を「吉田総合研究所」(本社・福岡市)と共に開発した。生ごみを回収し消臭・厨芥処理・飼料製造(特許)の工程を経て家畜飼料を生産する。毎日大量の廃棄物になる生ごみをリサイクルし、配合飼料より安い価格で提供している。さらに、同社

の後藤社長は発想を転換し、自ら養豚場と豚肉しゃぶしゃぶ店を経営することにした。牧場で自由に動き回る豚をリサイクル飼料で育て、自営のレストラン「秘密処」(ないしょどころ)で安全でおいしい豚肉を提供している。新しい発想へのチャレンジは、生ごみを高栄養価のリサイクル飼料に再生させ良質な豚肉を生んでいる。

リサイクル事業は巨額の処理施設を要するネックがある。これを廃棄物処理業者だけに負担させるには無理がある。地方公共団体・メーカー・リサイクル業界が一体となって推進することが肝要である。また、消費者にもごみを極力出さない工夫が求められる。人類すべてが自然環境を守り、限りある資源を有効に活用することが、今、人類に最も求められていることなのかも知れない。